

# 平成28年度 教育事業 「山から君へのメッセージ」～海拔0mからのチャレンジ～

- 1 趣 旨 冬期山岳活動を通して自然の厳しさを体感し、目標に向かって頑張りぬく力と協調性を培い、友情の輪を広げ、たくましく実践力のある青少年を育てることを目的とする。
- 2 期 日 平成28年12月25日(日)～28日(水) 3泊4日
- 3 対 象 者 小学5・6年生, 中学生, 高校生(不登校など心に悩みをもつ児童生徒を含む。)
- 4 募集定員 24人
- 5 参加者 26人(応募者43人)
- 6 指導者 南竹 成己 氏(鹿児島県山岳連盟)  
新栞 希美 氏(鹿児島県山岳連盟)  
国立大隅青少年自然の家職員  
熊本県立青少年教育施設職員2人  
ボランティア10人



## 7 日程と主な活動

12月25日(日)	12月26日(月)	12月27日(火)	12月28日(水)
9:00 受付	6:00 起床・荷物整理	6:00 起床・荷物整理	6:00 起床・荷物整理
9:30 出合いのつどい	6:30 朝食準備・朝食	6:30 朝食準備・朝食	7:00 朝のつどい
10:00 グループミーティング	8:00 キャンプ場出発	8:00 キャンプ場出発	7:30 朝食(レストラン)
10:20 登山学習	8:25 ▲とんがり山頂	8:20 キャンプ地出発	8:30 備品洗浄・片付け
12:00 昼食(弁当)	8:40 11番ポイント	8:50 ▲二子岳山頂	10:00 ふりかえり
12:45 登山準備	9:45 21番ポイント	9:35 ▲妻岳山頂	わかちあい
14:00 新城海の家出発	11:00 横岳稜線	10:00 妻岳分岐	11:45 別れのつどい
15:30 キャンプ場到着	12:00 ▲横岳山頂	11:15 ▲御岳山頂	12:00 昼食(レストラン)
テント設営	昼食準備・昼食	13:10 テレビ塔	13:00 解散
16:30 野外炊飯・夕食	13:55 ▲平岳山頂	13:30 御岳登山口	
19:00 ミーティング	14:30 キャンプ地到着	14:30 26番ポイント	
21:00 消灯	環境整備	15:30 バス乗車	
	15:45 テント設営	16:00 自然の家帰着	
	16:30 野外炊飯・夕食	16:30 あとかたづけ	
	19:00 中高生ミーティング	18:00 入浴	
	20:30 消灯	19:00 生還パーティ	
		22:00 消灯	

## 8 事業運営

- (1) 今年度は、海拔0mから高隈連山を縦走するルートに変更した。変更の際には、各行動日において体力的に偏らないよう宿営地を設定するとともに、事前踏査において危険のチェック及び対策を施した。
- (2) 参加者が安全に活動できるように、1日目に講義を計画して登山や安全管理について理解を深めるとともに、参加者の不安を除去するよう配慮した。
- (3) 活動は班を基本とし、野外炊飯活動も多く取り入れ、役割分担や協力する機会を確保した。また、各班にボランティアを配し、適宜支援が行える体制を整えた。



## 9 事業の実際

- (1) 1日目の午前中は、登山に関する知識や健康管理、パッキングや装備の確認をした。午後からは、海拔0mの新城海の家から自然の家キャンプ場までの登山とした。短い距離ではあったが、実際に重い荷物を背負って登ることの大変さや班の一員としての集団行動など体験を通して学ぶことができた。また、宿営地ではテント設営方法や食事作りに必要な道具の使い方などを体験し、2日目以降に生かせるようにした。
- (2) 2日目は、キャンプ場から標高約1000mの高隈稜線を目指して登った。午前中の横岳山頂までは気温が高く、ハードな登りに苦勞する場面もあったが、素晴らしい景色や達成感に歓声が上がった。午後から天気は崩れる予報だったので少しペースを上げ、雨が降る前に宿営地に到着し、テントを張ることができた。
- (3) 3日目は雨の中での行動となったが、互いに励まし合ったり、手をさしのべる姿が数多く見られ、全員が無事に全ての行程を踏破することができた。
- (4) 下山後の夜は、生還パーティの後に、班毎に今回の山行についてのふりかえりを行った。ろうそくの炎を囲みながら、各自の感想を述べ合った。
- (5) 最終日は装備等の片付け後に、全体のふりかえりを行った。自分の心の変化やこれからの決意、仲間へのメッセージなど、一人一人がしっかりと想いを整理して発表していた。



## 10 参加者の感想

- 学校生活ではまず、今まで話したことの無い人や先生に積極的に関わっていかうと思います。今までいて当然だった友達とも、一つ一つの会話を大切に接していきたいです。
- 今回の山登りは自信になった。これからは自分から進んで取り組み、最後まで、あきらめずにやり抜きたい。
- 山の中では水道も電灯も便所もなく、ふだんの暮らしの便利さがありがたいと思えた。いつも僕は誰かに支えられているんだと、みんなに感謝を伝えたい。
- 班の仲間のおかげで自分の見えなかったところが見え、楽しく登山をすることができたから、とても感謝しています。ありがとうございました。
- 私はこの「山から君へのメッセージ」に参加して、とても楽しい時間を過ごせました、学校にいるときと違って、笑うことがとても増えた気がします。今回の経験を生かして、これからはいやな人とも堂々と接していきたいと思いました。

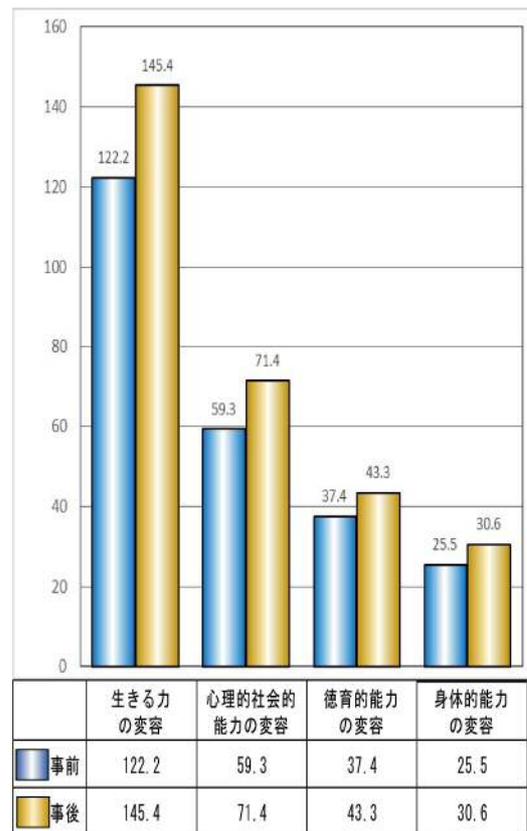


## 11 IKRの結果（表1）

生きる力の変容については、事前と事後において、2.3ポイント向上し、有意差が見られた。「心理的社会的能力」（12.1ポイント）「徳育的能力」（5.9ポイント）「身体的能力」（5.1ポイント）と全ての因子において有意な向上が見られた。

中でも「自分からすすんでなんでもやる」「だれにでも話しかけることができる」「自分のことが大好きである」「先を見通して、自分で計画が立てられる」「自分で問題点や課題を見つけることができる」「その場にふさわしい行動ができる」「早寝早起ができる」といった項目で1ポイント以上向上が見られた。

山中泊を含む3泊4日のハードな活動であったが、それ故に自分自身と向き合い、仲間と協力し、支えられて、最期まで達成できた体験が、参加者の生きる力にポジティブな影響を与えたと考えられる。



【表1：IKRアンケート結果】

## 12 成 果

- 「海から山頂まで」と目標をわかりやすくし、また登り中心で、疲労が蓄積する3日目の下りが短いルートを開拓できたことで、リスクをコントロールしながら効果的な事業運営ができた。
- 毎夜中高学生ミーティングを開き、リーダーシップを自覚するよう働きかけた。班付きのボランティアに支えられながら、小学生のフォローを行ううちに、普段引っ込み思案の子も、徐々に積極性が見られるようになり、「やればできる」という自信を得ていた。
- 山中での食事については、可能な限り温かいものを口にできるように、フリーズドライ食品に一手間加えたメニューを検討した。またシュラフの圧縮袋も新規に導入し、荷物のコンパクト化を図れた。
- 公立施設の職員が、視察を兼ねて運営に関わってくれた。全行程を共にしていただくことで、装備内容から安全管理、その場に合った指導など、事業運営に掛かるノウハウを提供できた。

